

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

ロシア サンクトペテルブルク日本語補習校 講師 宇賀持 綾子

目次

- ① サンクトペテルブルク日本語補習校について
- ② サンクトペテルブルクの新型コロナウイルス事情
- ③ 遠隔授業への取り組み
- ④ 遠隔授業での改善点
- ⑤ 遠隔授業の利点今後への課題
- ⑥ 現在の問題点と今後の課題

①サンクトペテルブルク日本語補習校について

- サンクトペテルブルク日本語補習校は、ロシア北西部にある学校である。
- 5月時点での児童・生徒の登録在籍数は小学部・中学部合わせて20名、講師数は計5名の小さな学校である。
- 通常は、毎週土曜日の午前中に、計4コマ（国語2コマ、算数系1コマ、理社系1コマ）の授業を、学年や人数に合わせて複式学級で行っている。
- 校舎はインターナショナル・スクールの校舎の一角を借りている。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- ロシアは中国からの水際対策に成功し、今年の2月まではコロナは他人事であった印象だったが、ヨーロッパからの流入を防ぐことができなかったようだ。
- 3月中旬から入国を制限したものの、4月から感染者が急速に増大。5月26日現在、世界で3番目の感染者数となってしまった。
- ロシアでは3月25日からロックダウンが始まったが、ロシアは連邦国家のため、規制や罰則は街によって異なっている。
- サンクトペテルブルクは、厳しい対策を講じている。
例えば、外出はスーパーと薬局、ゴミ出し、100メートル以内のペットの散歩などに限られている。

④ 遠隔授業への取り組み

- 下記の表は遠隔授業を展開するまでの簡単な経緯である。

3月18日	・ 当面の休校と卒業式と入学式の延期が決定。
3月21日	・ 講師のみのランチミーティング。
3月27日	・ 遠隔授業での補習校再開を検討。 ・ 保護者に遠隔授業の是非を問うアンケート実施。
4月1日	・ 役員・講師会議。 ・ アンケートにて、遠隔授業での補習校の再開が可決。
4月4日	・ 参加形態（オンラインか通信か）を問うアンケート実施。
4月8日	・ オンライン授業の説明会を実施。
4月11日	・ 新年度の遠隔授業開始。 ・ 1回目の授業の感想を問うアンケート実施。
4月16日	・ 1回目のオンライン授業後の役員・講師会議。
5月8日	・ 1ヶ月経過しての役員・講師会議及びオンライン懇親会開催。

- 現在、当校では、4月11日から遠隔授業を展開している。
- 週に一回しかない補習校を休校にしなかった理由は、保護者も講師も、子供達のために何かしてあげたいという思いが強かったからだと言える。
- 殊に、進度をなんとか維持してあげたい、子供達のストレスを少しでも軽減してあげたいという声が上がったからである。
- 参加形態は、オンラインによるライブ授業か通信教育が選択できるようにした。
- オンライン授業では、「Zoom」や「Meet Now」などのビデオ会議システムを使用している。
- 通信教育については希望者が3名と少ないため、担任教師の裁量によるが、私が担当している1名については、「Google Classroom」を使用して、提出物を管理している。

- また、遠隔授業に備え、現行の時間割を大幅に修正した。
- 大きく改訂した点は下記の通りである。
 - ① 授業を国語と算数系科目の2教科に限定し、複式学級を廃止したこと。
 - Zoomのブレイクアウト機能などを使用する方法も一考したが、特に低学年のオンラインでの複式学級は厳しいと判断した。
 - ② 兄弟姉妹の授業はできるだけ同時間に設定したこと。
 - 当初は、ハード面での問題を懸念していたが、保護者から「短時間で終わった方がいい」との希望があったため、そのようにした。
 - ③ 低学年の授業を朝に集中させたこと
 - 低学年は、通常時でも、お昼の時間に集中力が散漫してしまうことが多いためである。

⑤ 遠隔授業での改善点

- 1回目の授業を終えての反応は下記の通りである。
(保＝保護者・児童・生徒からの感想、講＝講師からの感想)
- 肯定的な意見には、「いつもと変わらない保」「不自由さはなかった保」「いつもより私語が少ない講」「いろいろなファイルが簡単に見せられる講」などがあった。
- 改善が必要な反応としては、「待ち時間にできる副教材が欲しい保」「途中で継続が中断するのは好ましくない保」「各家庭の通信環境に左右される講」「側に保護者がいて、子供の気が散ってしまう講」「低学年は画面共有の切り替えて集中力を欠きやすい講」などがあった。
- 上記のフィードバックを勘案し、さらに改善を加えた。まず、休憩時間を15分から25分に延長し、補講時間を設定した。これは通信トラブルなどを想定しての対処である。
- さらに、時間割の再変更も行った。なぜなら、時間帯によってネット環境の良し悪しが変わる家庭があったからである。
- はじめは、ブラウザやアプリを変更するなど苦心惨憺したが、この対処により問題が軽減するに至った。

⑤ 遠隔授業の利点

- 私個人が喜びと感じたこととしては、今まで複式学級で教えていたので、単式で一人一人にじっくり向き合えるようになったことである。
また、講師同士や役員の面々と密に連絡を取り合うようになったのも、利点の一つだと考えられる。
この禍を皆で力を合わせて乗り越えようという思いが、多面的に学校運営を円滑にしていると思われる。
- また保護者からは、クラスメートと会う機会が継続されたことが利点として挙げられている。
特に、3月末から始まったロックダウン以降は、児童は家族以外と会う機会が減っているので、喜びも一入であったことは予想に難くない。
他にも、「講師から勉強の範囲を指定してもらえるので、家庭学習が進めやすく、学習の遅れへの不安が軽減できた」という意見も聞こえた。

⑥ 現在の問題点と今後の課題

- まず、現場が現在苦勞していることは、教材がないことである。コロナ禍による物流の遅延などが原因であるので、不可抗力なことではあるが、教科書や教材の電子版の提供などのサポートが欲しいと強く感じている。現在は、保護者に教科書をスキャンしてもらったり、教師が副教材を自作したりすることで対応している。
- 次に、大人数のクラスで進捗が遅れ始めていることも懸念材料である。それで、6月の補習校を、通常の2回から4回にする方向で調整している。
- また、講師が児童のノートを直接見て、進捗状況や習得度を素早く測ることができないのも難点だと言える。現在は、児童が自ら進捗状況をカメラ越しに報告する形をとっているが、EpocCamなどのカメラアプリを利用するなど、何かしらの工夫が今後必要であろう。
- 概して、休校ではなく遠隔授業を敢行したことは良かったと言える。しかしながら、早急の応急処置であることは変わらず、不具合も少なくない。総括すると、学校現場の再開が望ましいというのが、現場で働く教師の意見である。